

## 半田良平の歌碑

- 1 たゝ一首の歌にその名をとゝめたるわか下野いままつりべのよせうの今奉部與曾布 (津田小敷地内 昭二五)
- 2 たはやすく雲のあつまる秋ぞらをみなみに渡る群鳥のこゑ (花木センター 昭五三)
- 3 ふる里の家の門みち長けれハゆきかえり見つ日の暮れかたを (深津 良平の生家 昭六一)
- 4 この原ゆただにそばたつ男体の山をかしこみ草に坐てあふぐ (松原近隣公園 平成二)
- 5 手ひとつに九人の子らをそたてたる刀自のミ魂そ此処にこもれる (兵庫塚細谷家墓地 昭一七)
- 6 山川の清き瀬見れはこの日ころせはしく生くる空しさをしる (下塩原 妙雲寺 不明)

### 半田良平の身辺・時事・社会詠 より

明治四〇年 (十月会 白露集掲載短歌より)

雲の峰大地より吐く赤熱を吸ひつつ生くるものと思ひぬ  
みちのくや草に寝て見ぬ夏の野にあそべる駒と海はしる帆と

大正九年(一九二〇)

これの世に直く生きむと人皆が乞ひ禱むほどの政を布け  
うちつけに苦しき言はぬ国民の心悉皆知り政を布け  
米の値は高くともよしこの国に生くる誇りをわれに有たしめ  
働きて家支えかぬる貧しさに人は何時まで堪へむと思ふや  
富むものは貪り飽かず貧しきはこころ尖れりわが生寂しむ

大正一〇年(一九二二)

この頃の日本の歩み急調子なりいずこを指して行くにかあらむ  
みづからに都合よきとき神ながらの国柄を説く人々を唾棄す  
年まねく頼みたりけるこの国をいまだも頼む吾命を賭けて  
この国をただに頼みて在り経れば憤ることのなしと言はなくに  
軍艦あまた造りてよしゑやし大御宝を飢えしむなゆめ  
良し悪しは我に分かねど読みもてゆくカルル・マルクスの書の親しさ  
外国のカルル・マルクスが書きし書読み親しみて我の苦しき  
いささかの土地を劃りて自がものと誇らふ人は呪われてあれ

昭和三年 (一九二八)

かく書かば無駄か知らねどこころ決め加藤勘十と書きにけるかも  
八人の無産党員選まれたりわが世明るく思はざらめや

昭和六年 (一九三一)

このままに過ぐべきことかわが国のいづこを見ても行き詰まりたり  
新しく興る階級の聲音を遠くにききてわれ疑はず

おもおもしろく伝わり来る足どりはいかにも新興階級のものなり

昭和七年 (一九三二)

国こそぞり人勢ふときなにゆゑの戦ぞやと思ひ見るべし  
たはやすく戦をいふこの人は死を他人事と思へるらしき

(加藤勘十 初の普選で無産党員  
全国最高得票にて当選した。)

吾命 (わぎのち)

軍艦 (いくさぶね)

書 (ふみ)

外国 (とづくに)

劃 (くぎ) り自 (し)

尖 (とがれ) り生 (よ)

禱 (め) 政 (まつりごと)

悉皆 (たな) 布 (し) け

有 (も)

勢 (きは) ふ

他人事 (ひとごと)

戦が起きて幾月「生命線」「権益」といふ語も聞き慣れにけり

### 昭和八年（一九三三）

資本主義機構を一気に覆へさむとして囚われし人らに悔あらしむな  
資本主義社会の後に興るものは何ぞと問はば人おどろかむ

### 昭和十一年（一九三六） 2・26事件

夜おそく声ひびき来るラジオより知り得たることのあはれしき  
七百とも九百とも伝ふる兵士らは今宵いづこに如何にしてあむ  
重臣ら暗殺されし日の夜半に何に昂ぶりて眼覚めたりけむ  
愈に事決まりぬといふ噂は雷を見る思ひして聞きぬ  
蹶起せる青年将校らは三日経て反乱部隊となりをはりたり  
馬上より兵を論しゐる将校をラジオに聴きて眼に描くなり  
歴史家は徳川末期にたぐへてぞ蓋しや書かむ幾とせの後

### 昭和十二年（一九三七）

蔑めるナチス・ドイツと防共協定をなさねばならぬ時いたれりや  
首相一人悪といふにあらねども圧し来るものあらがはむとす  
たたかひに出て行く馬は人よりもこころにぞ沁む今の吾には  
昂ぶらず送られてゆく若者を路に迫り越してかへり見にけり

### 昭和十五年（一九四〇）

あからさまに口には言はず行為にて政治を批判するものを恐れよ

### 昭和十六年（一九四一）

み祖よりもち伝えたるころばせ疼くがごとく動くことあり

祖（おや）

### 昭和十七年（一九四二） （次男克二病死二三歳）

死にし子を思へば苦しきのふまで何を待みて生ききし吾ぞ  
死にし子を由縁のふかき母上の辺に葬りて帰り来れり

由縁（ゆかり）

### 昭和十八年（一九四三） （長男宏二病死二七歳）

掌をかへすが如き行動を国の上に見てこの日頃あり  
路の上に吾を蹴仆し蹂み躪る土足の主を誰とも知らず  
子の臨終静かなりきと聞くだにも目頭熱くなりて涙す  
子のために何一つ手を下さずして告別式をけふ終りたり

蹂（ふ）み躪（にじ）る  
臨終（いまは）

### 昭和十九年（一九四四）

大空を月は行けども国民ら深き憂ひに籠る今宵ぞ

（七月サイパン島陥落

三男信三 戦死 二三歳）

独りして堪えてはをれどつはものの親は悲しといはざらめやも  
みんなみの空にむかいて吾子の名を幾たび喚ばば心足りなむ

彩帆（サイパン）

去（い）ぬる

咽喉（のど）

臥（こや）せる

この土の下にねむれるわが子らと墓並べむは幾とせの後

### 昭和二十〇年（一九四五） 三月上旬

言挙げは吾はせねどもうら深く国を憂ふる者の一人ぞ

一夜寝ば明日は明日とて新しき日の照るらむを何か嘆かむ

（絶詠）